

## 恋多き女 和泉式部

一条天皇の中宮・彰子の局には紫式部、赤染衛門、和泉式部など、平安時代花開いた女流文学の才媛が集められた。これは時の長者・藤原道長が、文学好きの一条天皇が娘・彰子の局に足繁く通うよう計らったことによるとされている。そして、「紫式部日記」のなかに同僚批評が出てくることになるのだが、このなかで紫式部は、和泉式部について以下に書いている。

「和泉式部といふ人こそ、おもしろう書き交はしける。されど和泉はけしからぬかたこそあれ、うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人はかない言葉のほひも見え侍るめり（中略）恥づかしげの歌よみやと覚え侍らず」（和泉式部という人は、興味深い手紙の遣り取りをしていましたが、**感心しない面があります**。気を許してさらさらと手紙を走り書きしたときにはその方面の才能があり、ちょっとした言葉づかいにも色艶が見えるようです。（中略）けれどこちらが恥づかしくなるほどの優れた歌詠みと思われません）

紫式部が「けしからぬかた」と書いているのは、彼女の恋愛遍歴のことである。

和泉式部が彰子の局に入る前に、和泉守・橘道貞と結婚したが、冷泉天皇の第三子・爲尊親王との熱愛が世に喧伝され、夫とは離婚、父親からは勘当される。熱愛した爲尊親王があえなく亡くなってしまい、追憶の日々を送っている和泉式部の元に爲尊親王の弟・敦道親王から求愛の文が届く。

敦道親王は彼女を屋敷に迎え入れようとし、敦道親王の正妃が家出する原因となる。そして敦道親王との約一年間の日々を綴ったのが「**和泉式部日記**」である。

この他にも源雅通、源利賢らとの浮き名も噂されており、誠に恋多く面目躍如である。

彼女は平安時代を代表する歌人であり、「古今和歌集」など勅撰和歌集には246首もの歌が収録されており、「後拾遺和歌集」で最多入集歌人となっている。

小倉百人一首には「あらざらむこの世のほかの思い出に今ひとたびのあふこともがな」（もうすぐ私は死んでしまうでしょう。あの世に持ってゆく思い出として、今もう一度あなたにお会いして愛されたいわ）もう一度逢いたい人が誰か特定されていない。

実は和泉式部には、橘道貞との間に娘がおり、小式部内侍といい、母娘ともに中宮・彰子の局に勤めていた。娘も母親同様和歌に優れており、小倉百人一首にも「**大江山生野の道の遠ければまだ踏みも見ず天の橋立**」（大江山を越えて生野に行く道が遠すぎて（母がいる天の橋立に行ったことも（母からの）手紙も見たことがありません）が収録されている。

このとき、母・式部は再婚の夫・藤原保昌の任地丹後国（天の橋立がある）にいて、遠くにいる母を思う心情を読んでおり、「生野」と行く、まだ「踏み」が文 にかけているという。

